

総論

満点	70点	目標得点	53点	試験時間	60分	偏差値	国際政経:73 政治:74 経済:72
大問数	5	小問数	50				
【解答形式】		選択式	37/50問	記述式	12/50問	論述式	1/50問
【問題難易度】		C	6/50問	B	15/50問	A	29/50問
※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す							

Topics

- 1：大問5題。第1・2問近世、第3～5問近・現代(戦後史1)。古代・中世がほぼ出題なし。
- 2：全て史料問題は例年通りだが、部門別では、政治史・外交史が中心。文化史も要注意。
- 3：論述問題は、2007年から近・現代の内政・外交の重要テーマを扱う問題に定着した(120字)。

こんな力が求められる！

- 1：授業進度にあわせ、修得した知識を確実に答えられるようにすることがまずは重要。次いでこの知識をより深めておく必要がある。全問史料からの作問なので、合否を分けるものは史料問題に対応できる能力である。上記した知識を、史料を通して学び直すことが次に重要。方法はテキストの史料で基本を学び、お茶ゼミ配布の資料集や山川出版社などの史料集で関連事項の史料を読み込んでおけば、未見史料にも対応できる読解能力がつくはずである。
- 2：設問形式は正誤問題よりは選択問題が主流。下線部の該当語や空欄の適語の選択が多いが、近世以降はかなり細かい知識も要求されるので幅広い知識の習得を目指したい。その方法は、テキスト・教科書は脚注も含めて理解を心がけ、注目事項は用語集なども調べるようにしたい。それからすでに上でも述べたが史料を丹念に読む作業も忘れないこと。
- 3：本年度は出題範囲が、ほぼ近世以後となった。この傾向が来年度以降定着するかはまだ時間を要するので、古代(原始からの出題はない)・中世の学習を疎かにしていいとは言えないが、これらの時代は政治・外交・経済の重要事項を的確に理解しておき、関連史料を読みこなしておく。学習の力点は近世以降に置き、織豊政権・江戸幕府の政治・外交、明治以降は憲政史を中心とする政治史、外交史、社会運動史、文化史では近世以降の思想・学問・文学史を軸に学習を進め、過去問を見ておくことを第一に、お茶ゼミの問題集や市販問題集を演習して定着をはかりたい。

## 大問別分析

【I】

予想配点	14/70 点	時間配分の目安	9/60 分
出題分野・テーマ	政治史・外交史 豊臣政権の蝦夷地・琉球政策		
出題形式	選択、正誤、記述		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す A 1 : A 2 : A 3 : A 4 : A 5 : A 6 : B 7 : B 8 : B B 1 : A 2 : A 3 : A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：5月期3・4回，冬期対外交渉史Ⅰ2回，1月期3回 センター：4月期4回，5月期1回，冬期対外交渉史Ⅰ2回		

### ●本大問の特徴・概要

豊臣秀吉が蠣崎氏と島津氏等に宛てた蝦夷地・琉球に関する二通の命令書からの出題。早稲田大では蝦夷地・琉球史は出題頻度が高い。一通は、文禄2(1592)年「蠣崎志摩守(慶広か)」への蝦夷地の仕置きに関し、アイヌへの非礼の停止と船舶税(津料)の徴集を命じたもの、もう一通は、同年と思われるが、「嶋津修理大夫入道(義久)」などに「唐入(朝鮮出兵)」の際の「与力(加勢)」の琉球兵を引き連れての参陣を命じたもの。史料の読み取りに若干難しい選択問題もあるが、記述問題は全問正解を出したい。

### ●注目すべき小問

A問1～5、B問1～3は基本を大切にしておけば8割近く取れることを実感していただきたい。上記もしたが「夷人」・「文禄」・「蠣崎」・「義久」・「唐入」・「羽柴」・「嶋津」など名印になる用語から歴史的出来事を絞り込み、設問を通じてそれを確定して、正答を出していく。

残ったA6～8に注目しよう。

問6 朝鮮出兵後、日本と李氏朝鮮は国交断絶になったが、徳川家康が対馬の宗氏に命じて和議を成立させ、1607年に朝鮮から使節が初来日した。初期三回は回答兼刷還使といって「唐入」の後始末、捕虜の送還が行なわれた。正解はイとなる。消去法でもいける。アは勘合貿易、ウは秀吉没後撤兵、エは国交断絶、オは江戸時代、中国との国交に基づく貿易なし。

問7・8 史料読解力が試される問題。

問7は、「船役の事、前々よりありきたれる如くこれを取るべし」で選択肢アを選ぶ。

問8は、eの「琉球」をおさえることが前提だが、「すなわち与力として、そのほうへあい付けられ」、「唐入の儀人数等奔走せしめ、召し連れ出陣致すべく候」で選択肢エを選ぶ。

## 【Ⅱ】

予想配点 14/70 点	時間配分の目安 10/60 分
出題分野・テーマ 政治史・文化史 新井白石とその時代	
出題形式 選択、正誤、記述	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す A [i]A [ii]A [iii]A [iv]C [v]C [vi]B [vii]A [viii]B B [ix]B [x]B [xi]C	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：6月期3回，夏期文化史1回，10月期1・2回，12月期1回 センター：5月期4回，6月1回，夏期センターレベル文化史3回，12月期1回	

### ●本大問の特徴・概要

新井白石の日記(1657-1725)を出典とし、元禄・宝永・享保年間(1696-1717)の記載から作問してある。文治政治期の絶頂期5代将軍綱吉の時代の政治・社会・文化を尋ね、元禄年間から雨森芳洲・木下順庵・藩翰譜・赤穂事件・扶持米売却の5題、宝永年間から宝永の噴火・富士山・綱吉死去・長崎・シドッチの5題、享保年間から宿駅制度の1題の構成であり、白石の正徳の治からの出題はない。

問題の内容では、A・B難度の問題のほか、本大問のC難度の問題では扶持米売却はともかく当時時間の把握など、出題者の意図としては歴史の常識なのだろうが、少々厳しい問題も見られた。

### ●注目すべき小問

A

問ivの扶持米売却に関して。a・c・eの文に問題はなく、むしろ史料読解に役立つ。dの代金の一部は銀で支払われているという文も、「代金四両壺分=金支払い、七匁八厘=銀支払い」でうなずける。この代金額を金の額に統一するため、eの交換率である1両=60匁を勘案すると、七匁=10分の1両であるから大した額ではない。最後に史料では、金1両あたり米6斗9升6合であるかので、これで売却代金を割れば、売却した扶持米の額がでる。6石余となり、bの5石は誤りとなる。

問vの当時の時間の動きは、昼の正午と真夜中0時を九ツとして2時間経過ごとに「八ツ・七ツ・六ツ・五ツ・四ツ」までいき、また九ツに戻るのが基本。この点でいけば、aの「九時」の日の出の時間は誤り、bの「九半時」は大体午後1時頃出仕していたことになる。これが判明すれば、「八・七・五ツ」は、おおよそ午後2～8時位であり、誤りであることがわかる。円を描き、2時間単位で区切り、上で指摘したように「九～四ツ」を当てていく方法を推奨したい。

問vi 綱吉(1680-1709)のような重要な支配者の場合は在位または在職期を覚えておくことで得点につながる。eの江戸十組問屋の成立は1694(元禄7)年が正解。あとは吉宗・田沼・定信の政策で思い出したい。問viiiの宿駅制度は、消去法はきつい選択肢もあるので、aの宿駅ごとの人馬継立のaを素直に選びたい。以下、消去法を使うとb=町奉行→道中奉行、c=本陣・脇本陣は大名から宿代は取らない。d=物資輸送の主役は水上輸送、e=宿駅制度は明治政府により廃止。

B

問ixの藩翰譜は書けるかどうかのポイントであり、問xiのボンペ(1829-1908)は厳しい。

## 【Ⅲ】

予想配点 14/70 点	時間配分の目安 15/60 分
出題分野・テーマ 文化史・社会経済史 啓蒙思想と労働問題の黎明	
出題形式 選択、正誤、論述(120字)	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す A 1 : B 2 : A 3 : A 4 : A 5 : A B B	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：夏期近現代史Ⅰ 1・5回 10月期2回 12月期3回 冬期社会経済史Ⅱ 2回 センター：7月期3回 夏期文化史4回 近現代史Ⅰ 1・5回 冬期社会経済史Ⅱ 2回	

### ●本大問の特徴・概要

前半部は、明治初年の福沢諭吉・森有礼・中村正直などの社会改革・改良論などの提唱と政府の法整備のせめぎあいのなかから政党が誕生したこと、後半部は、資本主義の発展が労働組合期成会の結成など労働運動の黎明を促したことを述べた史料から、作問した論述問題を配した小問題。労働運動など社会運動も早稲田大入試の定番であるが、本問は選択問題・論述問題ともに、基本を踏まえた問題と言える。

### ●注目すべき小問

Aの選択問題では、問2の『西国立志編』・3の治安警察法・4の労働問題期成会・5の横山源之助に関する設問は全問正解を出したい。コメントをほどこしたいのは問1の問題である。福沢諭吉の説明文で正しいのは西南戦争における西郷隆盛を擁護した『<sup>ていちゅう</sup>丁丑公論』である。ここまで知っている人はそう多くないと思われる。消去法を使おう。アの福沢家は会津藩ではなく九州の中津藩、イ学んだ学塾は懐徳堂ではなく緒方洪庵の適塾、ウの福沢の海外渡航は三度、通商条約批准のため咸臨丸での渡米(1860)、幕府使節として渡欧(1862)、岩倉使節団には参加していない。エの「脱亜論」では論理的に来るべき日清戦争を指示した。

Bの論述問題は自由党・立憲改進黨・立憲帝政党三党の中心人物と主な主張を120字にまとめる問題。基本に忠実な問題とはいえるが、注目すべき問題とはいえないだろう。

## 【IV】

予想配点 14/70 点	時間配分の目安 10/60 分
出題分野・テーマ 大正・昭和初期の東京と軍国主義国家体制	
出題形式 選択、正誤、記述	
小問別解答と難易度 ※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す A 1 : A 2 : B 3 : C 4 : A 5 : B 6 : B 7 : B 8 : A B a : C b : A c : A	
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連 ※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：夏期近現代史Ⅱ 4回，10月期3・4回，12月期4回 センター：夏期近現代史Ⅱ 4回，10月期1回，12月期3回	

### ●本大問の特徴・概要

大正から昭和初期の地下鉄建設、天皇機関説問題、相沢事件など動きや事件を、史料を通じたずねた問題。

史料(1)は未見史料で、東京の交通事情の劣悪さから説いて、地下鉄の必要を述べたもの。

史料(2)は必須史料、おなじみの美濃部達吉の弁明演説から機関説の核心部分を述べた部分。

史料(3)はたまたに見かける相沢事件に関する史料で、相沢三郎が何故決起したかを陸軍省当局の談話から知りうる。

Aの選択問題では、この時期の演劇・ジャーナリズム・教育など文化史に力点を置きつつ、政治史のほか、都市人口など盲点をつく問題を尋ねている。

出題数の少ないBの記述問題では、難問・標準・易しい問題とレベルの違う問題を配してきた。

### ●注目すべき小問

Aの選択問題では、問1の榎本健一は、古川緑波とともに軽演劇の必須の人物。

問2の問題は 1927 年の地下鉄が開通する頃、まだ無かったものをたずねた問題では、よく出題されるものが一同に会しているで、年号を指摘しておきたい。正解のハの電気釜は、戦後の 1955 年の登場。以下、イのラジオ放送 1925 年、ロの映画の製作(松竹)1920 年、ニの週刊誌 1922 年、ホのデパート 1894 年などである。

問5の文官高等試験の前提となったものは何かという少し考えさせる問題であるが、1886年というヒントがある。この年の出来事といえば学校令公布があり、その一つ、ニの帝国大学令を選べばよい。

問6の天皇大権も盲点をついた問題。憲法に規定された天皇の多くの権限を天皇大権と総称するが、イの治安の維持は規定はない。

Bの記述問題では、問Eの 1919 年公布・施行されたのが都市計画法。日本初の都市計画制度上の法令であり、区画整理などの指定権を政府が持った。

問Cの国防本義と其強化の提唱は、本学を狙っているくらいの諸君ならば解けなくてははいけないだろう。

## 【V】

予想配点	14/70 点	時間配分の目安	12/60 分
出題分野・テーマ	社会経済史 戦後経済の復興		
出題形式	選択、正誤、記述		
小問別解答と難易度	※問題難易度：C難問、B合否を分ける問題、A正答すべき問題、を示す A 1 : A 2 : A 3 : A 4 : A 5 : C 6 : B 7 : B 8 : A B 1 : A 2 : A 3 : A		
お茶ゼミカリキュラム・テキストとの関連	※高3履修分に限定 ハイレベル・総合：9月期2・3・4回，直前特訓戦後史 センター：10月期3・4回，直前特訓戦後史		

### ●本大問の特徴・概要

いわゆる『経済白書(年次経済報告)』(1951年度・1956年度)から作成した史料問題。

史料1の1950年を扱った報告は未見史料であるが、読解になんら支障はなく、1949年の安定恐慌の状況から、1950年の朝鮮戦争の勃発が特需をうみ貿易収支が出超に転じたことを述べる。

史料2の1955年の報告は必須史料の一つに入り、それまでの復興依存・特需依存から脱却して、設備投資などを中軸とする高度経済成長のスタートのシグナルとなった有名な「もはや戦後ではない」というフレーズを配したものからの出題となった。

出題は1950年代を中心とする経済問題を中軸とし、政治・外交などからも若干問われているが、年号や流れを確実におさえておくことと解きやすい問題が多かった。

### ●注目すべき小問

Aの選択問題。

問1～4 繰り返すが、落としてはいけない問題を落とさないことである。

問5 1955年が「戦後経済最良の年」といわれるその事情を尋ねた。詳細に渡り、難しい。素直な解答法としては、実質経済成長率が年平均10%を超えるのは1960年代なので、あの10%以下を選べばよい(字際9%程度)。この時点において難易度はB程度ですむが、この事実を忘れてしまったりすると、迷路に入る。一応の判断基準を示しておくこと、いの労働争議は世界的な影響をうけ、日本でも1960年の池田内閣の登場までは、労働争議は発生件数も参加人員も増加傾向にあった。うの繊維産業は戦後の輸出を一時支えたが、50年代半ばからは、金属・機械・化学(化学繊維も登場)の輸出が伸張した。えのテレビが洗濯機、冷蔵庫を上回るようになるのは1960年代に入ってからであり、その契機となったのが、1959年の皇太子(現平成天皇)結婚の実況中継であった。おの石油がエネルギー供給源のメインになっていくのは1960年代以降であり、その象徴的な出来事が、1960年の三井三池争議である。

問6・7 これも細かなことを尋ねた問題。まとめて説明しておくこと、経済安定本部が1947年から「経済実相報告書」として発表した経済の報告書。安定本部は'52年の経済審議庁を経て、'55年に経済企画庁になるが、名称は「経済年次報告」、いわゆる経済白書と呼ばれるようになった。

Bの記述問題a～bは全問正解を期したいが、bの統一日本社会党の初代委員長は、左派社会党の鈴木茂三郎である。右派社会党から書記長となった浅沼稻次郎とともに早大出身であり、早大入試では出題頻度が高いので注意。